



東京YMCA

2013年1/2月号 発行所 公益財団法人東京YMCA 発行人 廣田光司
135-0016 東京都江東区東陽2-2-20 電話 03-3615-5562

東京YMCAの使命
東京YMCAは、イエス・キリストによって示された愛と奉仕の精神にもとづいて、青少年の精神、知性、身体の全人的成長を願い、地域社会に奉仕し、公正で平和な世界をつくるための運動を展開する。

URL <http://tokyo.ymca.or.jp>

インタビュー

変革の時代に 人を育てる

与えられた賜物を活かす

豊かになった日本では、かつてのようにハングリー精神を動機にして学び、働くことは難しくなっています。何のために学ぶのか、仕事の意味は何かを、人が教える必要があります。――東京YMCA賛助会会長である北城恪太郎氏は、この数年間、中学校に向いて、子どもたちに働く意義を教えています。



北城 恪太郎 氏

1944年生まれ。慶應義塾大学工学部卒業後、日本アイ・ビー・シー株式会社入社。1993年、48歳で、経営者、15歳に仕事を教える。2011年から東京YMCA賛助会会長を務める。

▼中学生には、どのようなお話をなさっているのですか。

仕事とは、自分に与えられた能力を活かして、社会に貢献することだということを話しています。人の役に立つことによってお金をいただいて、そして生活を支えていくのです。また、仕事には達成感があります。自分が働くことで、社会の役に立っていると思えることは、すばらしいことです。どんな仕事でも必要のない仕事はないのですが、自分の好きな仕事ができれば、こんなに幸せなことはいりません。ですから、この高校・大学に入学するよりも、大人になって、自分の力を活かせる場所で働くことの方が、人生にとって大事なことだと話しています。

とはいえ、この時代に自分が将来何をしたいのかを見つけて出すのはなかなか難しいことです。そこで私は、「人生にはきっかけがある」という話をしています。私自身、中学生のときに尊敬する先生から「英語の成績がよくないね」と言われたことがきっかけで、高校時代に一生懸命英語を勉強しました。それが社会に出てから役に立ちました。また高校生になると、「これからはコンピューターの時代になる」という雑誌の記事を読んだことがきっかけで、工学部へ進みました。何が役に立つかわからないけれど

も、きっかけがあったら、それに向かって努力してみることが大事です。そこから道が開けるかもしれません。途中で目標や興味、関心が変わってもかまいません。常に努力して準備をしていると、それがチャンスにつながっていくと思っています。

▼中央教育審議会の委員も努められ、教育について積極的に発言されています。

試験問題には必ず正解がありますが、ビジネス社会には正解はありません。新しいパソコンを作るときも、性能のいいものがないのか、安いものがないのかなど、いろんなことを考えます。社会は何を必要としているのか、何が問題かを自分で考え出し、そしてやってみなければ分かりません。それがビジネスです。受験勉強だけが勉強だと思ってしまうと、本来の勉強の目的とは違ってしまう。

私は経済同友会の教育委員会の委員長をしていたとき、企業にアンケートを行い、新入社員を採用するときの基準を調べましたが、大学の名前や成績で採用する会社は1割以下でした。代わって「熱意」「実行力」「協調性」「コミュニケーション能力」「自ら課題を見つけて解決策を探る能力」「論理的思考力」

力」、そういった能力をもつ人材が求められています。学校の成績がいいだけでは採用されませんし、たとえ入社しても活躍できません。いい学校に入って、いい会社に入れば安泰と考えるのは、20年前の考え方です。社会が変わってきていることを親にも伝えなければならぬと思っています。

日本は戦後、海外を真似て追いつくとしてきましたが、先進国になった今は、他国と同じことをしていても競争に勝てません。過去の延長線上とは違うこと、変革、革新が求められています。科学技術の分野だけでなく、教育でも福祉でも行政でも、常に新しい挑戦をして新しい事業を創り出していかなければならぬ時代になったのです。

にもかかわらず日本の教育は、いまだに人と同じようにやることを求め、「出る杭」を打ってしまいます。文科省は「生きる力」とか「総合的学習」と言っていますが、大学受験は相変わらず、得意な分野がある子どもが受かるシステムになっていないのが現実です。

アメリカでは、小学校低学年でも自分の考えを発表し、討論する授業があります。日本は先生の話を一方的に聞くのが、勉強です。ですから社会人になって国際会議に出ても、日本人は議論ができません。教育を改革しなければならぬと思っています。

人は一人ひとり違ってきます。それぞれに神様から与えられた賜物を持っています。そのいいところを認めて、ほめて



東京YMCAにほんご学院の学生たち。中国、モンゴル、ベトナム、台湾、韓国など様々な国で、就職・進学のため、真剣に学んでいる

育てることが何よりも大事です。点数のための勉強ではなく、自分の興味関心があることに挑戦する機会を与え、それを存分に伸ばしてあげれば、自信をもって、他人と違うことにもチャレンジできるようになります。

▼若者の就職難など、不安なニュースも多いですが。

企業に就職することはほかに考える必要はないと思います。アメリカでは、優秀な学生は会社を作る、それができない人が企業や役所に就職する考えられています。日本のように、つぶれる心配のない役所に入ることが一番安全だという考え方は、活力ある社会を創るのとは、逆の発想です。会社を作るという発想がもっと必要です。職場を作らないで就職だけしようと思うから難しいのです。

私は、新しい事業に挑戦する人々たちを育てる環境が必要と考えて、「創業支援の税制(エンジェル税制)」の拡充を支援しました。起業しようとする会社に個人が資本を出すと所得控除される制度です。そういう制度を使ってお金を集めて、会社を作ったらいと思っています。東北地方でも、もっと会社を作れば復興支援になると思っています。

▼YMCAへの期待をお聞かせください。

今は、日本人だけでなく外国の人たちも一緒に仕事をする社会です。日本人の中でも多様化が必要ですから、自分とは違う考え方の人と一緒に生きていくことを学ぶことがすごく大事です。そういう意味でYMCAのやっている活動は非常に意味があると思います。障がいのある子どもの活動も、多様性を理解する上で非常にいい機会になります。自分と違う人たちと、キャンプなどで24時間共に過ごせば、学校の教室では語り合えないような議論もできるでしょう。いろんな興味をもった人々と議論ができることはすばらしいことだと思います。

他の団体で、20人のキャンプに1人だけ韓国の女の子がいたのですが、彼女は英語も積極的に話し、日本の高校生たちが圧倒されていました。YMCAは国際的なネットワークを活かして、日常的に異文化との交流ができると思います。自

分と違う人たちと接することは、子どもにとって大きな刺激になり、視野が広がります。

またYMCAは、幼稚園や英語教室、ウエルネスなど、多様な接点があるのいいですね。その接点を大事にして、支援者の裾野を広げていくのいいと思います。企業の社会貢献等に応えて、企業からの賛助を得ることも大切ですが、個人の方が景気による変動を受けにくいので、少額でも継続して支援くださる方を増やしていくのいいと思います。

昨年、公益法人への寄付金には、「税額控除」が認められるようになりました。私はこの法案の作成にかかわったのですが、これは「国民による事業仕分け」ともいえるものです。ぜひこの制度を周知徹底して、会員を増やしていくのいいと思います。

▼「明るく、楽しく、前向きに」がモットーだそうです。

私は30代で管理職になって以来、「明るく、楽しく、前向きに」仕事をするといいことを常に心がけてきました。どんな仕事をやるにしても、私は明るい職場・組織を作りたいと思っています。明るく、楽しく、前向きに、楽しく仕事したいからです。多くの人は特別な事情がない限り、40年くらい働くわけです。仕事の場合に楽しいということは、人生を楽しく豊かにしてくれます。

そして、「なぜできないか」ではなく「どうやったらできるか」と、常に前向きに考えるようにしています。「必ずできる」と思えば、アイデアも出てきて、ほとんどのことはできるようになります。できないと思ったら、もうアイデアは出なくなってしまうものです。

また私はクリスチャンとして、神様から与えられた賜物を活かすという考え方を大事にしています。誰でも一人ひとり違う賜物を神様から与えられているので、命だと思えます。努力して失敗しても、神様が備えてくださった道だと思えば、あまり悩まず明るく進みます。喜びがあらわれている人を見て、教会に来る人が増えればいい、そう思っています。

YMCAのシンボルである下向き赤三角「▽」はご存知の様に、一辺が「精神、知性、身体」を表し、三つの要素の調和のある全人的成長を願っています。このマークは1891年に北米YMCA体育主事ルーサー・ギューリック氏によって考案されました。(ギューリック氏は子どもの頃に日本に滞在しています)。▼さらにもうひとつの三角があります。1907年にアメリカ、メイン州、セベーゴ湖畔にギューリック氏が妻とともに開設した女子キャンプMethuen Campのシンボルは上向きの三角「△」で、各辺はそれぞれ「働(Work)、健康(Health)、愛(Love)」を表し、当時の女性としての望ましい生き方を願ったものと思われま

す。キャンブの名前も、三つの要素の頭文字で文字をつなげたものです。▼福沢諭吉は「学問のすゝめ」の中で、「知育・徳育・体育」の三つを上げています。スポーツの世界では「心、技、体」のバランスが大事だと言われます。また昔から「読み、書き、そろばん」の三項目を身につけておくことが大切であると言われていたなど、物事の望ましい調和のとれた状態を表すために、重要な事柄を三つ上げることがよくなされます。▼新年にあたり、今年の目標や心構えを三つ挙げて、自分なりの赤三角を作ってみるのはいかがでしょうか。(国際委員 高橋 伸)

新年を迎えて

ノーベル賞に思う 先人の偉業



東京YMCA評議員会
会長
勝田 正佳

不安と緊張の続く世相の中で山中伸弥教授のノーベル賞の受賞は朗報でした。YMCAに關する先人にも受賞者がいるのです。1901年に創設されたノーベル平和賞の最初の受賞者はアンリ・デュナン。彼が1863年に設立した国際赤十字によるものです。彼はその8年前に世界YMCA同盟の結合の基準となったパリ憲章の起草者の一人でした。ジュネーヴYMCAの理事だったのです。

また、北米YMCA同盟の総

タイによる福音書」20章27節。YMCAの使命と活動が世界的に評価を得ていることの証左といえましょう。

新年を迎えて目を世界に向けつつも、大震災による避難者への支援を継続し、且つ足下では地道に会員増強、ファンド・テ

イベロップメント、コミュニティの育成を粘り強く推し進めていきます。事業活動では著しい経営改善がなされてきていることは喜ばしいことです。しかしまだ途半ばです。一層の創意と努力が期待されます。

神に喜ばれる活動を

東京YMCA総理事
廣田 光司



2011年8月に認可を受けた東京YMCAにほんご学院は2012年、各国の留学生を迎え、本格的に始動しました。東

京YMCAは神田会館の時代に日本語科がありました。再スタートしたことで、現在は、中国、台湾、韓国、ベトナム、モンゴル、タイ、ロシアから、在日外国人の方々を含めて30人が在籍し、日本語の勉強をしています。彼等は単に言葉を通して、またYMCA会員としてのふれあいを通じて日本の文化を学んでいます。東京YMCA

皆様は単に言葉を通して、またYMCA会員としてのふれあいを通じて日本の文化を学んでいます。東京YMCA

法人間の連携を



東京YMCA
法人学校
理事長
徳久 俊彦

新年おめでとうございます。皆様はどのような新年を迎えられたでしょうか。

このような中で、私達はどういうにそれぞれの役割を果たして行くべきでしょうか。

政治の貧困を嘆く間にも、世の中に見捨てられる人々が出て来ます。社会の構造を根本的に変える努力は欠かせませんが、反面助けを求める人々に先ず手を差し伸べることが必要です。その両面を役割分担・相互連携を上手にやりながら進めることが大事ではないかと私は思います。

昨年、アメリカのオバマ大統領が行われ、日本もその例外ではありませんでした。ただ変化の兆しはあるものの、先行きは不透明のままであるように思われます。日本はその中で、戦前の日本に戻るような動きが懸念され、私達は否応なしに「政治」と向き合わざるを得なくな

さて、東京YMCAは公益法人となつて3年度目を迎えます。学校法人も共に一体となつて総合力を発揮出来るように努めねばなりません。そのため、毎月双方の理事代表と総理事・学院長が連絡会議を持ち、現状を互いに報告し、問題の共有と解決を図るよう努めております。江東幼稚園は江東YMCAと同じ場所所創立以来相互連携を図っております。東雲ではグラウンチャ東雲と「こども園」の連携はもろろんのこと東雲ファミリーセンター始め各施設や東陽町の体育・英語等の教育施設との連携を深めつつあります。医療福祉専門学校に於いても、YMCA理解、キリスト教理解を深める機会を通して浸透を図っています。

昨年8月、学院長の飯忍さんが病のため天に召されました。東雲の開設、3か所となつた施設の総合運営に命を賭けた働きを思い、改めて感謝を捧げます。

高校生13人 石巻でボランティア



軽食や子どもの遊び、お茶っこなど6種類のコーナーを、13人で考えて開催した。

「わいわい広場」に 250人来場

「自分たちは何が出来るか、どういう風に声を掛けたいか、どう考えたけれど、多くの人が来て、ありがたうと言ってもらえたのが、すごく嬉しかったです。」

石巻から東京へ帰るバスの中、ひとりの高校生が話していました。

11月23日から25日の3日間、東京YMCAとしては初めての高校生を対象とした石巻でのボランティア活動を行いました。募集開始から実施まであまり時間のない中、ホームページやボランティアセンター、学校の掲示板に貼り出された募集要項を見て「自分のできる何かをしたい」と13人の高校生が集まりました。

実施前の事前ミーティングでは、3日間過ごす仲間との関係を作り、「ボランティア」について、そして「自分たちは何が出来るか？」を考える時間を持ちました。吹奏楽部の2人から「クラリネットを演奏してみたい」。マジック部に所属する子から「子どもたちに披露したい」。何もできないけれど、ラクビー部だったので力仕事は任せて下さい。今回のボランティア活動へそれぞれの想いが伝わってきました。

東京から7時間半のバス移動を終え、まずは日和山公園、石巻漁港へ行き、東日本大震災の姿を自分の目で肌で感じることにしました。「想像以上の光景に涙しか出ませんでした」「自分たちが何かをしたい」ということはおこがましいのかもしれないと、夜の振り返りの時間に語っていました。

2日目、清泉女子大学学生YMCAの2人も合流し、石巻の仮設住宅に住んでいる方、近隣の小学校、団地の方を対象に「わいわい広場」という緑日を実施しました。焼きそば、綿あめ、ポップコーンの軽食コーナー、クッキー作り・スライム作りの体験コーナー、ミサンカ作り、スクラッチア

12月15日に事後ミーティングを持ち、3日間を丁寧に振り返りました。その中で「またみんなと石巻へ行きたい」と想いを確認し、今年の夏にも一度石巻へ行くために、今後、街頭募金活動などを行う予定です。本場の意味の「プロジェクト」が始まりました。

(Toby 出沼一弥)

石巻通信 vol.8

YMCA石巻支援センター
伊藤 剛士



石巻支援センターでアリーダーとして参加しなりました。

は、12月22日(土)に、てくれたことです。今回、このように中学生子どもクリスマス会を行が初めてのボランティア生がボランティアとしていました。センター近隣活動参加という子もいまプログラムに参加しての児童・園児30人ほどがしたが、それを積極的に参加したことは、被災地の参加、ゲーム大会やケータ的に楽しみながらプログラ少年リーダシップ育成キ作りを行い、共にクリラムを担ってくれたという新たな一歩でした。また、クリスマス会は、とても喜ばしいこと以外にも、12月のプログララムには、石巻・仙台のクリスマス会では2つ震災直後は泥かき、清掃作業から始まった石巻大学生をはじめとした青年の活動は、時間の経過年たちがリーダとして支援やプールプログラムとともに、被災者(仮設活動に参加してくれましに参加してくれた児童が住宅居住者など)の心身た。

クリスマス会では2つ震災直後は泥かき、清掃作業から始まった石巻大学生をはじめとした青年の活動は、時間の経過年たちがリーダとして支援やプールプログラムとともに、被災者(仮設活動に参加してくれましに参加してくれた児童が住宅居住者など)の心身た。

多く来てくれたことでのケアとコミュニケーション。青年ボランティアは、一緒に遊んだり再生、そして子ども達の単なるお手伝いさんではないに会うのを楽しみにし居場所づくり(教育支援なく、彼ら自身がボランティア活動を通して成長していたようで、「今日は、遊び場づくり)へと推テア活動を通して成長○リーダはいないの 移していきました。まする存在です。YMCA?」という声があちこち、今では他県からのボは青少年をエンパワームらで聞かれました。2 ランテアが中心に担ントする場として、今つ目は、この夏休みに行ってきた支援活動を、地元後、より多くの地元の青われたテララー基金青少年の住民の手にシフトさ少年と共に活動を行える年国際交流プログラムにせ、被災地の自立とリーよう、励んでいきたいと参加してくれた市内の中 ダーシップをサポトす 思います。

学生たちが、ボランティアの動きも見られるように

